

陳舜臣さんを語る会通信

NO.12 Jul. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年7月1日

陳舜臣文学の白眉 『桃源郷』

『桃源郷』は、集英社の「小説すばる」2000年1月号から2001年7月号に連載されました。『桃源郷』が2001年10月、集英社から単独の書籍として刊行されたとき、冒頭に、陳舜臣さんご自身執筆の解説、「この作品を読むかたがたへ」が付け加えられました。小説として、異例のことです。『桃源郷』は、構想50年、満を持しての執筆で、それだけ、思い入れが強かったのでしょう。下の枠内、陳さんの気持

ちがよく表れている最後の箇所を引用しました。

陳舜臣さんの本格小説としては、『青山一髪(孫文)』『曹操残夢 魏の曹一族』と並び、最晩期を飾る一作です。

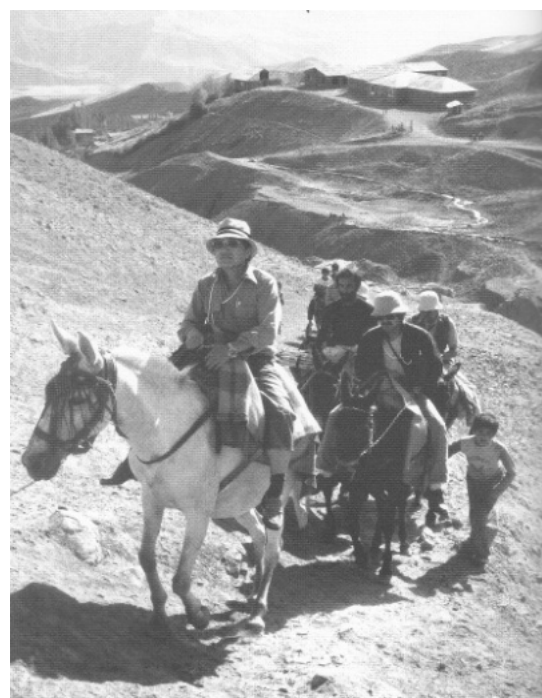
下枠内画像は、驃馬の背に跨がりアラムート山に登る陳さんです。(集英社『陳舜臣中国ライブラリー26』より) (編集委員 橘雄三)

桃源郷といえ、誰もが武陵(現在の湖南省常德県)を連想するであろうが、私はその地を雲南にもとめた。武陵色を薄めるために、私は「境」を「郷」にあらため、雲南の大理や麗江まで行った。桃源郷をもとめるコースで、私がまだ行っていないのはイベリア半島だけであった

民家で、大ぜいで雑魚寝をした。私は以前よりひそかに小説の構想を練っていて、翌日も驃馬の背でそれをつづけた。二十数年かかって、ようやくそれが実現した。ハサン・サッバーフもウマル・ハイヤームも、このアラムートの宿で、私の脳裏にかすかにその原形がえがかれていたのである。

この小説のほとんどの主要シーンの舞台は、私の曾遊の地であった。なかでも忘れられないのは、一九八二年にNHKシルクロード取材班と一緒に行ったイランのアラムートの旅である。アラムートの

歴史を書くには、それが二千年前であろうと三千年前であろうと、現場に身を置いたほうがよいのにきまっている。



『桃源郷』(二〇〇一年 集英社) 冒頭、「この作品を読むかたがたへ」より

ので、連載中にトレド、コルドバ、グラナダ、マラガ、リスボンをまわった。これほどつぶさに取材したことは、これまでなかった。アラムートの山を、驃馬の背にまたがって小説のことを思いながら登ってから、二十年たっている。ウマル・ハイヤームの詩に親しんでから、五十年以上になる。この小説は青春時代の私の胸のなかで醸し出され、壮年時代はさらにあたたためられ、老いのまさに至らんとするいま、やっと生み出されたという気がする。

二〇〇一年七月

文中傍線は編集委員加筆

《「私はその地を雲南にもとめた」(陳舜臣さん)》

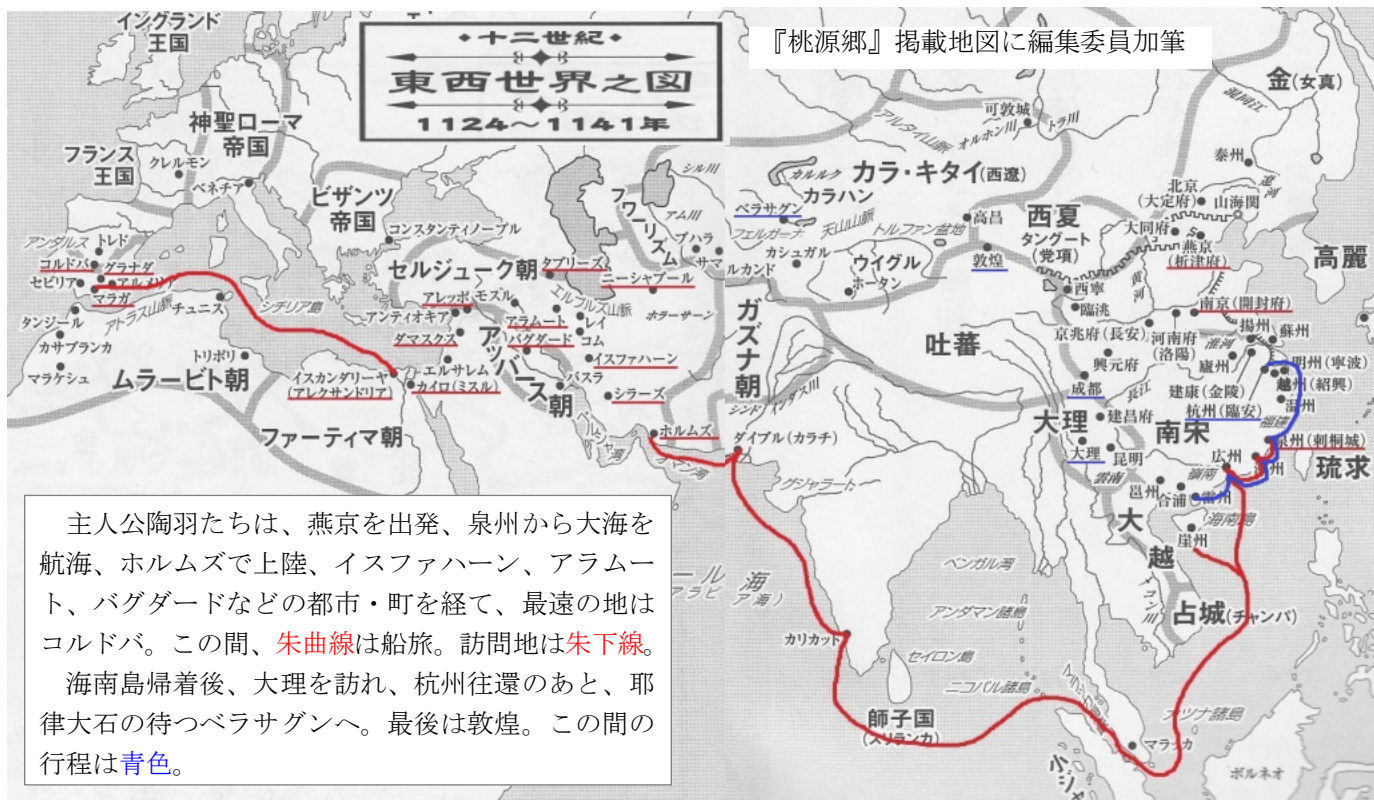
「桃花源記」■東晋の陶淵明作。武陵の漁夫が道に迷って桃林の奥にある村里に入りこむ。そこは秦の乱を避けた者の子孫が世の変遷を知ることなく、平和で裕福な生を楽しんでいる仙境であった。歓待されて帰り、また尋ねようとしたが見つからなかった

という内容。(広辞苑)

ところで、陳さんは、桃源郷を雲南にもとめたとおっしゃっています。作中、20年に及ぶ大旅行から戻った主人公一行は、雲南の大理国を訪れます。そこでは、強い外圧もなく、宗教に寛容な国王の下、仏教徒、イスラム教徒、マニ教徒が共存し、暮らしていました。一行の旅は、まだ続きます。

『桃源郷』の登場人物と主人公一行の遍歴

登 場 人 物	
とう 陶羽	主人公。漢人で字は翔和。1103年、大遼国南京道析津府(燕京)生まれ。陶家は代々四方館(外交・通商を扱う役所)の訳使をつとめてきたが、「桃源郷」より下界に遣わされた探界使という家族の末裔であり、また、かくれマニ教徒であった。耶律大石の命により、大食(アラブ)への使者として長い旅に出る
やりつたいせき 耶律大石	遼の主要な皇族。遼滅亡の危機に西征、西遼(カラ・キタイ)を建国。マニ教徒
しょうじゅうどう 蕭住同	耶律大石のために情報収集に当たる腹心。契丹人。実は、かくれマニ
白中岳	大同から来た耶律大石の使者で、探界使の一人。陶羽とともに旅に出る
ハーシム	貿易商。陶羽、白中岳一行に巨船の便を図ったり、船旅といえば登場。コルドバで紙工房を建てる
馬群	陶羽、白中岳一行の用心棒
安如泰	神出鬼没の自称ソグド人。一行の一人
宙	貿易港カリカットで海の男たちを手伝う宋の女性。安如泰と夫婦になる
弘海	一行の一人。日本僧。十五歳で宋に渡る。探界使の印らしき赤い痣を持つ
ハサン・サッパーフ	シーア派でも過激なイスマイル派の拠点、アラムートの長老。安如泰に連れられた陶羽を同志として迎える。実は西方マニの領導者
ウマル・ハイヤーム	四行詩の詩人。セルジューク帝国屈指の大学者。アラムートの長老と並ぶ西方マニの領導者
ガージマルド	ウマル・ハイヤームの身辺を守る侠客グループ「アイヤール・ゲイン」の首領。サブズやハーシムとともに、マニの教友を率いる
サフィエ	ベネチア出身で「アイヤール・ゲイン」の女仲間。のち、陶羽の妻になる
ザンギー	セルジューク帝国の軍人。アタ・ベク(スルタンの子の後見役)の一人。要所アレppoを押さえて、有力国家の主に成長。イスラム教信仰を捨てる
瞎老(シャラオ)	燕京の長老で、東方マニの領導者。目が不自由。密教系の修法とゾロアスターの眩術とを融合した秘法を編みだす。マジダリの大師匠
マジダリ	眩術を使う。瞎老の弟子

主人公一行遍歴スタート(上の地図の**赤線**、ホルムズまで)

燕京	燕京は、ほぼ、現在の北京の地。耶律大石、陶羽に白中岳と連れだって西へ赴くことを命ずる。1120年
南京(開封)	ここよりホルムズまでの引率者ハーシム、及び用心棒の馬群登場。船運にて長江へ。途中、安如泰加わる。その先、泉州までの具体的記述はない
泉州	一行は、ハーシム所有の巨船泉久号でホルムズを目指す。カリカット停泊後、北上中、一行に弘海加わる。百余日の航海でホルムズ着

『桃源郷』主人公一行の遍歴（続）

主人公一行遍歴（ユーラシア西半分 2 ページ地図の赤線、ホルムズから）

ホルムズ	ホルムズからキャラバンを組み、シラーズを経てイスファハーンへ
イスファハーン	陶羽、イスファハーンのバザールで眩術をかけられ意識を失う
アラムート山砦	陶羽がとある村の一軒家で目を覚ますと安如泰と宙がいた。陶羽は、「山の長老」ハサン・サッバーフに預けられることとなる。山の長老の命で、ウマル・ハイヤームを迎えにニーシャプールへ向かう。陶羽は、このあたりから、自分が、かくれマニ教徒で、共通の目的を持って活動する集団のメンバーであることに気づく
	ウマル・ハイヤームは山砦で、ハサン・サッバーフとの時間を過ごし、やがて、バグダードへと去る
	ハサン・サッバーフの命で、陶羽、白中岳、弘海、安如泰の4人は、スーフィーの恰好をしてバグダードへ向かう。途中、ハサン・サッバーフの訃報が届く（1124年）
バグダード	ウマル・ハイヤームを訪ねる。この町で、ウマル・ハイヤームを守る侠客グループ、アイヤール・ゲインとその首領ガージマルドを知る。アイヤール・ゲインの一員、サフィエは陶羽の妻となる。ガージマルドはウマル・ハイヤームを送って、ニーシャプールへ
ダマスクス	一行は、ニーシャプール組を除きダマスクスへ。ここには、教友が経営する隊商宿があり、いくつものスーフィーの修道場があった。陶羽はアイヤール・ゲインのメンバーとの議論から多くを吸収する
アレppo	安如泰、宙、陶羽、サフィエの4人は、ガージマルドの命で、ザンギー占領下のアレppoへ向かう。アラムートの長老の側近だったサブズが待っていて、ザンギーに会う
カイロ	4人とアイヤール・ゲインのメンバーが合流。ウマル・ハイヤームを送ってニーシャプールへ行ったガージマルドもウマル・ハイヤームの葬儀（1131年）をすませ、戻ってくる。イスカンダリーヤ（アレクサンドリア）へ移動
イスカンダリーヤ	スーフィーの修行をしながら滞在、イベリア半島行きのハーシムの船を待つ
マラガ	トリポリ、チュニスを経て、イベリア半島のマラガ上陸
コルドバ	ハーシムは陶羽と白中岳を連れ、グラナダに紙工場の親方を訪ねる。コルドバで紙工房を立ち上げる
ホルムズ	陶羽たち一行は、イスカンダリーヤ、イスファハーンなど、ほぼ、来た道をホルムズへ戻り、大順号で帰国

ほぼ20年後、東アジアに戻り着いた後の遍歴（2 ページ地図の青線）

海南島	海賊に出会ったり、大時化で船が大破したりしながら、海南島まで戻るも、大修理を余儀なくされる
大理	「大理へ行け」が次の指令であった。一行は馬にまたがり、大理へ向かう。大理には、方臘の乱で排斥を受けたマニ教徒が大勢、逃れ込んでいた。当時、大理は、段氏が治める平和な国であった。
	大理で、後にマニの教友とわかる語り部、段妍とその夫、洪綱に出会う。「会昌の排仏令（845年）」でのマニ教徒の受難、大理への流入など、古い歴史を知る。
	陶羽は大理で、東方マニ教徒の指導者瞎老（シャラオ）に会う
泉州	大理国王チャーターの船に陶羽らも便乗、杭州へ向かう。途上、泉州に一ヶ月ほど滞在。陶羽たちが泉州を出航した二十年前に会った「自分が何者かわからなくなった人たち」を訪ねる。陳舜臣さんは、この人たちのことについて、後に来たマルコ・ポーロの『東方見聞録』に記述があるとおっしゃる
杭州	南宋の都、杭州。大理の王も、陶羽ら一行も、百万都市、不夜城杭州の夜を楽しむ。「すでに退廃のにおいがして」と馬群。陶羽は、鴿のリレー通信で、耶律大石から呼び出しを受ける
ベラサグン	耶律大石は、セルジューク朝やホラズムの軍を破ったあと、病床にあった。彼は二十年ほど前、西方マニの指導者のウマル・ハイヤームやハサン・サッバーフとしきりに文通していた。東方の宗教指導者の瞎老とも、マニの将来について語り合った。「マニを超えて行く」という命題を理解するために、東から西へ信者を遊学させることがきまり、大石は陶羽たちを送り出したのである。「いちど彼らに会いたい」
	陶羽夫妻と白中岳は、一度、大理へ戻り、成都を経てベラサグンへ。騎馬を利用して急いだとあるが、具体的ルートの記述はない。陶羽たちが到着して十五日目に耶律大石は息をひきとる。1143年
敦煌	燕京に戻る陶羽たちは、敦煌で、「ずいぶん待ったぞ」と馬群に声をかけられる。馬群の案内でマギダリの大師匠・大弦人に会いに行く。そこにいたのは瞎老で、瞎老が大弦人だったことに驚く
	真っ暗な部屋の暗闇の底から、しぼり出すような瞎老の声が、マニの教友たちに話しかける。甘味をとまった闇の中で、瞎老の眩術にかかり、やがて、意識を失う。教友たち、それぞれは、眩術の中でそれぞれの夢を見、夢の中で瞎老のサゼスションを受け、自分の進む道を見つけ、この部屋から出て行く。陶羽は最後の一人になる。瞎老の言う。「わしの術にかかっているあいだ、お前の心は海にむかって歩いていた。行け、海へ」

『桃源郷』のエッセンス 下線はすべて編集委員の加筆

《1. 『桃源郷』のエッセンス》

12世紀はじめの中国。金によって遼(キタイ)は250年の歴史を閉じた。金に隷属することを潔しとしない耶律大石たちは西方に逃れ、西遼(カラ・キタイ)を立てた。大石はマニ教徒であったが、自身の信仰は心のうちにとどめ、信仰は強制すべきものではないと信じていた。理想の国家を築くべく陶羽たちを西へ、ペルシャへと向かわせた。

陶羽たちは、ペルシャでは、アラムート山砦の長老ハサン・サッバーフや天文学者・詩人ウマル・ハイヤームの薫陶を受け、さらに、行動・修業をともにする同志から感化を受けながらイベリア半島まで遍歴する。

次の引用は、帰路途上での、陶羽の述懐です。

いつのまにか十五年たっている。東の地にかすかに伝わるマニの教えが、たびたびの弾圧をいかに乗り越えてきたかを調べるのが、自分たちの任務であると、陶羽は勝手に思っていた。

しかし、彼らの信仰は、ウマル・ハイヤームやアラムートのハサン・サッバーフによって、改革が加えられていた。生まれ変わることで、マニは生きのびようとしている。マニという名もすてたのだ。陶羽はそのことを、スーフィーの修行によって会得したのである。

陳舜臣さんは、名前を捨てた宗教を「まことの信仰」と表現しています。

最後の章、「それぞれの夢」で瞎老が語ります。

わしはニーシャブールのウマル・ハイヤームとも、アラムートのハサン・サッバーフとも、まことの信仰とはなにであるか、問答を重ねてきた。…よいか、マニといった名にこだわるのは、いかにつまらぬことであるか、ほとんど同じところに気づいた。これはわしと心の問答を重ねた、耶律大石も悟ったことだ。それでおまえたちを修行に出したのじゃ。世の中に出よ、俗界のわざを磨くことを忘れるな。ハーシムの紙のようにな。大石の国づくりのようにな。そして、わしの奇術のようにな。

陶羽たちは、瞎老の眩術の中でそれぞれの夢を見、夢の中で瞎老のサゼスションを受け、自分の進む道を見つけます。陶羽に瞎老の声と言います。「わしの術にかかっているあいだ、お前の心は海にむかって歩いていた。行け、海へ」

宗教に寛容な政権(例えば耶律大石やザンギーのような統治者)のもとで、「まことの信仰」をもつ人たちが、俗界のわざを磨き、生き生きと生活している。そこが「桃源郷」なのです。

《2. 陳さん、「名前を消す」ことへのこだわり》

集英社『陳舜臣中国ライブラリー 30』「自作の周辺」から抜粋引用します。

宗教は、心のよりどころです。魂の救済ですね。しかし、科学が発達してくるにつれ、だんだんその部分がやせていくんですよ、魂の部分がね。

今は、心のよりどころを宗教だけに求める時代じゃないと思うんですよ。いわゆる、今までの宗教ということですけども。

だから私は、宗教とか主義、思想という名前は全部消して、とにかく一つのもので、どこか心にあると。それだけでいいんじゃないかという、そういう世界がいつかは現出してくると思っているんです。

たとえば、それが、共産主義であってもそれでいいわけですよ。共産主義とかいう名前を消してね。とにかく、名前をつけるからいけないんですよ。なまじ名前をつけるから、戦争するんだという考えが私にはあるんです。

仏教だとか、キリスト教だとか、何々教だというものが、そもそも世の乱れになるという思い。そういう乱れた世の時代に、それを悟った人がいて、さっき言いましたけれど、ただ真心、一つのを心に持っている人たちが集まればいいんだと。そこがユートピアの世界なんですね。

この世の中の乱れは、何に因ってきたんだと。それは名前からきているということです。

《3. 陳舜臣さんの桃源郷》

唐代初期に中国に流伝したマニ教は、9世紀中葉、会昌年間の廃仏令では、最も過酷な弾圧を受けた。その信者たちが、ひそかに雲南に逃れ込み住み着いたことが、北宋末のほうろうの乱で排斥されたマニ教徒を受け容れる素地となった。

主人公一行が雲南の大理国を訪れたとき、そこでは、強い外圧もなく、宗教に寛容な国王・段和誉の下、仏教徒、イスラム教徒、マニ教徒が共存して暮らしていた。主人公一行の旅は、大理国を訪れたあとも、杭州、ベラサグン、敦煌…と続く。

右の画像は大理崇聖寺の陳舜臣氏 1999年 (集英社『陳舜臣中国ライブラリー 30』より)

